

加古川市埋蔵文化財調査集報 II

平成15年12月

加古川市教育委員会

加古川市埋蔵文化財調査集報 II

平成15年12月

加古川市教育委員会

序 文

加古川市は豊かな自然に恵まれるとともに、近年では播磨臨海工業地域の一員としても発展しています。

市域には、約620箇所もの埋蔵文化財が存在しており、当市の長い歴史を今に伝えていきます。

これらの遺跡については、開発行為にともなう緊急調査などの理由で、毎年発掘調査が実施されています。今回刊行した報告書は、平成8年度から平成15年度までの間に、国庫補助事業によって実施した比較的小規模な発掘調査や試掘・確認調査の内、整理作業が終了した溝之口遺跡平成11年度調査と平津構居跡確認調査、JR東加古川駅北地区試掘調査について結果をまとめ、報告書として刊行したものです。

小規模な発掘調査には制約があるため、十分な調査成果を上げたとは必ずしも言えませんが、この報告書が当市の歴史を理解する上で一助となれば幸いに思います。

最後に、それぞれの発掘調査に際して、ご指導・ご協力をいただきました兵庫県教育委員会、加古川市文化財審議委員会、並びに地元の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成15年12月

加古川市教育長
松 本 究

例　　言

1. 本報告書は、加古川市教育委員会が平成8年度に実施した平津構居跡確認調査と平成11年度に実施した溝之口遺跡発掘調査及び平成15年度に実施したJR東加古川駅北地区試掘調査の報告書である。
2. 本書に掲載した発掘調査は、いずれも国庫補助事業（国庫補助50%・県費補助25%市負担25%）によって実施した。
3. 調査組織は以下のとおりである。

平成8・11年度

調査主体者	加古川市教育長 松本 純
調査担当者	加古川市教育委員会 生涯学習推進室 西川英樹
調査作業員	田中鉄二・中山茂・岩佐力三・佃徳光・乗垣忠司・間處康成 永井操・采野尚子・柿本ゆり子・高松八重子・南良子・南悦美 佐藤敦子

平成15年度

調査主体者	加古川市教育長 松本 純
調査担当者	加古川市教育委員会 文化財調査研究センター 西川英樹
調査作業員	乗垣忠司・小野安夫・采野尚子・柿本ゆり子・高松八重子・南 良子・南悦美・瀬川信子
遺物整理員	西川美佳・蛭田朱美・田辺文子・福田あゆみ・森川祐子・谷三 鈴・村津多佳子・津村久美子

4. 本報告書の編集は、西川英樹が行った。

5. 発掘調査に関しては、奈良国立文化財研究所工楽善通氏、兵庫県教育委員会村上賢治氏、大平透氏、山本誠氏、高砂市教育委員会藤原清尚氏、清水一文氏、姫路市教育委員会多田暢久氏の各氏から指導・助言を受けた。記して感謝します。

6. 本書に係る図面・写真・遺物は、加古川総合文化センター（加古川市平岡町新在家1224-7）において保管している。

目 次

本文目次

J R 東加古川駅北地区試掘調査報告書.....	1
平津構居跡発掘調査報告書.....	11
溝之口遺跡平成11年度第1次発掘調査報告書.....	25

挿図・表目次

第1図 周辺遺跡分布図.....	3
第2図 試掘調査位置図.....	4
第3図 トレンチ配置図.....	5
第4図 土層断面模式図.....	8
第5図 周辺遺跡分布図.....	13
第6図 平津構居跡位置図.....	14
第7図 調査区設定位置図.....	19
第8図 平津構居跡遺構平面図.....	20
第9図 平津構居跡土層断面図.....	22
第10図 出土遺物実測図.....	23
第11図 周辺遺跡分布図.....	27
第12図 溝之口遺跡位置図.....	29
第13図 発掘調査位置図.....	30
第14図 調査区設定位置図.....	33
第15図 溝之口遺跡遺構平面図.....	34
第16図 溝之口遺跡土層断面図.....	35
第17図 溝之口遺跡出土遺物実測図.....	36
第1表 溝之口遺跡周辺遺跡分布図地名表.....	28

写真図版目次

- 写真図版 1 JR 東加古川駅北地区試掘調査写真
- 写真図版 2 JR 東加古川駅北地区試掘調査写真
- 写真図版 3 JR 東加古川駅北地区試掘調査写真
- 写真図版 4 JR 東加古川駅北地区試掘調査写真
- 写真図版 5 平津構居跡調査写真
- 写真図版 6 平津構居跡調査写真
- 写真図版 7 平津構居跡調査写真
- 写真図版 8 平津構居跡調査写真
- 写真図版 9 平津構居跡遺物写真
- 写真図版10 平津構居跡遺物写真
- 写真図版11 溝之口遺跡調査写真
- 写真図版12 溝之口遺跡遺構写真
- 写真図版13 溝之口遺跡遺構写真
- 写真図版14 溝之口遺跡遺物写真
- 写真図版15 溝之口遺跡遺物写真

JR東加古川駅北地区試掘調査報告書

JR東加古川駅北地区試掘調査報告書

調査場所 加古川市平岡町新在家1670-1他
調査期間 平成15年9月3日～10月2日
調査機関 加古川市教育委員会 文化財調査研究センター
調査員 西川 英樹

1.はじめに

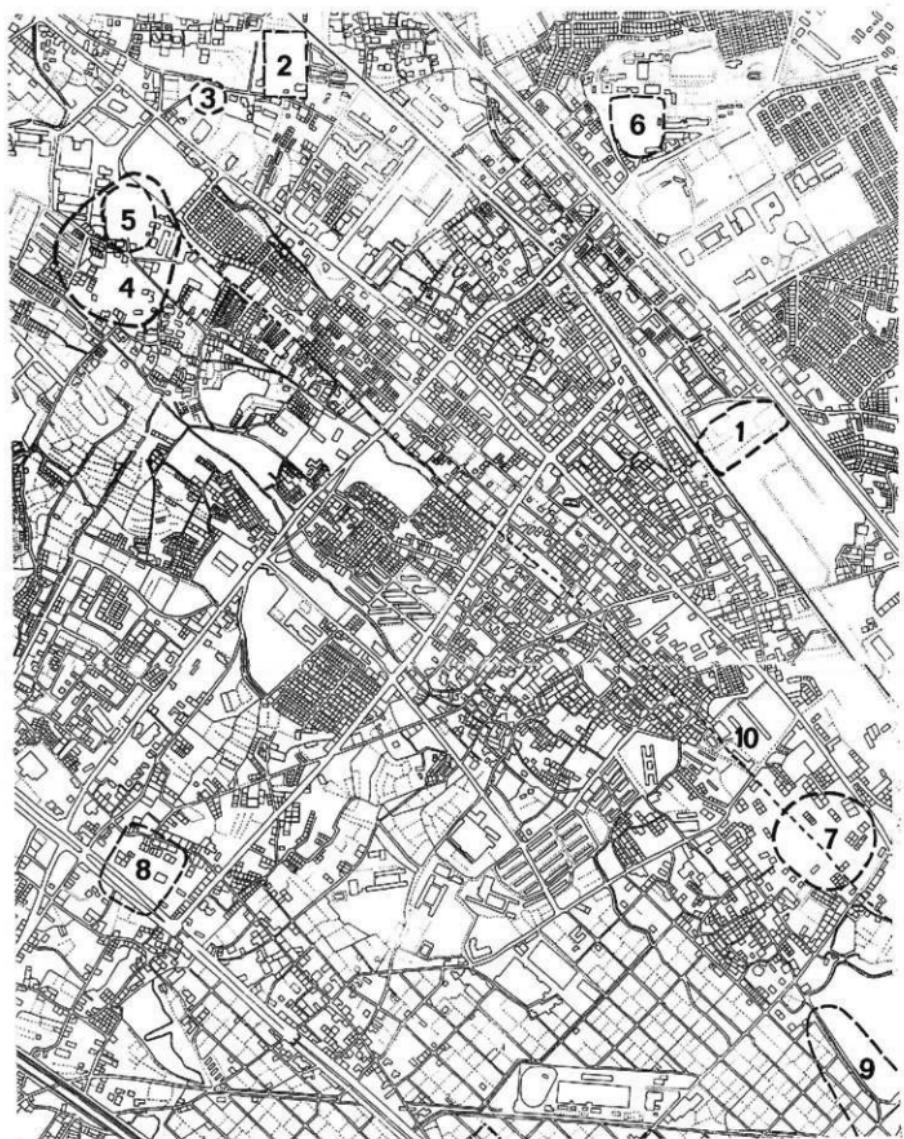
この調査は、加古川市平岡町新在家のJR東加古川駅北地区区画整理予定地約3ヘクタールにおいて実施したものである。当地は現在、未利用地として残されている場所である。この土地において区画整理事業が行われることとなったため、国庫補助事業により、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施することとした。なお、調査地に隣接する10ヘクタールの区画整理用地については、別の時期に調査を実施した。整理終了後、別途報告する予定である。

市域南部の平岡町は平地が続く地形で、海岸線と平行して西北西から東南東にのびる段丘群の階段状地形が顕著に発達している地形である。各段丘面間には、段丘と同方向の浅い凹地があり、それらは主に溜池や水田などとして利用されている。

この地域の遺跡としては、調査地の北西約800mの位置に中世城館跡として横倉城跡が知られているが、調査は行われておらず、実態は不明である。南約1kmの位置に弥生時代の集落跡である長畠遺跡が存在する。平成元年度に発掘調査が行われ、弥生時代中期から後期の竪穴住居跡8棟などが検出された。また、潰目池の周辺地域には旧石器時代から弥生時代の遺跡である山之上遺跡が存在する。山之上遺跡は1976～1977年に発掘調査が実施され、ナイフ形石器など多数の旧石器が出土した。平成13年度には住吉神社の南側隣接地が調査され、大中遺跡の一部と思われる弥生時代後期の溝や土壙などが検出された。

国道2号線の南側には古代山陽道の想定地が存在するが、発掘調査による成果はまだ得られていない。駅ヶ池南側の大歳神社周囲には古大内遺跡が存在する。古代山陽道の駅家跡と推定され、付近からは古大内式軒瓦などの播磨国府系瓦が出土する。また、同地には地元の伝承をもとに、古大内城跡が想定されている。国道2号線北側の野口神社境内には野口廃寺跡が存在する。平成6～7年に発掘調査が実施され、塔跡、講堂跡、小堂宇跡などが検出された。野口神社の南西に野口城跡が想定されているが、実態は不明である。

今回の調査地については、今まであまり調査が行われていなかった地域ということもあり、周知の遺跡は知られていない。当地が段丘上にあたると考えられたことや大規模開発であることなどから試掘調査を実施することとなった。

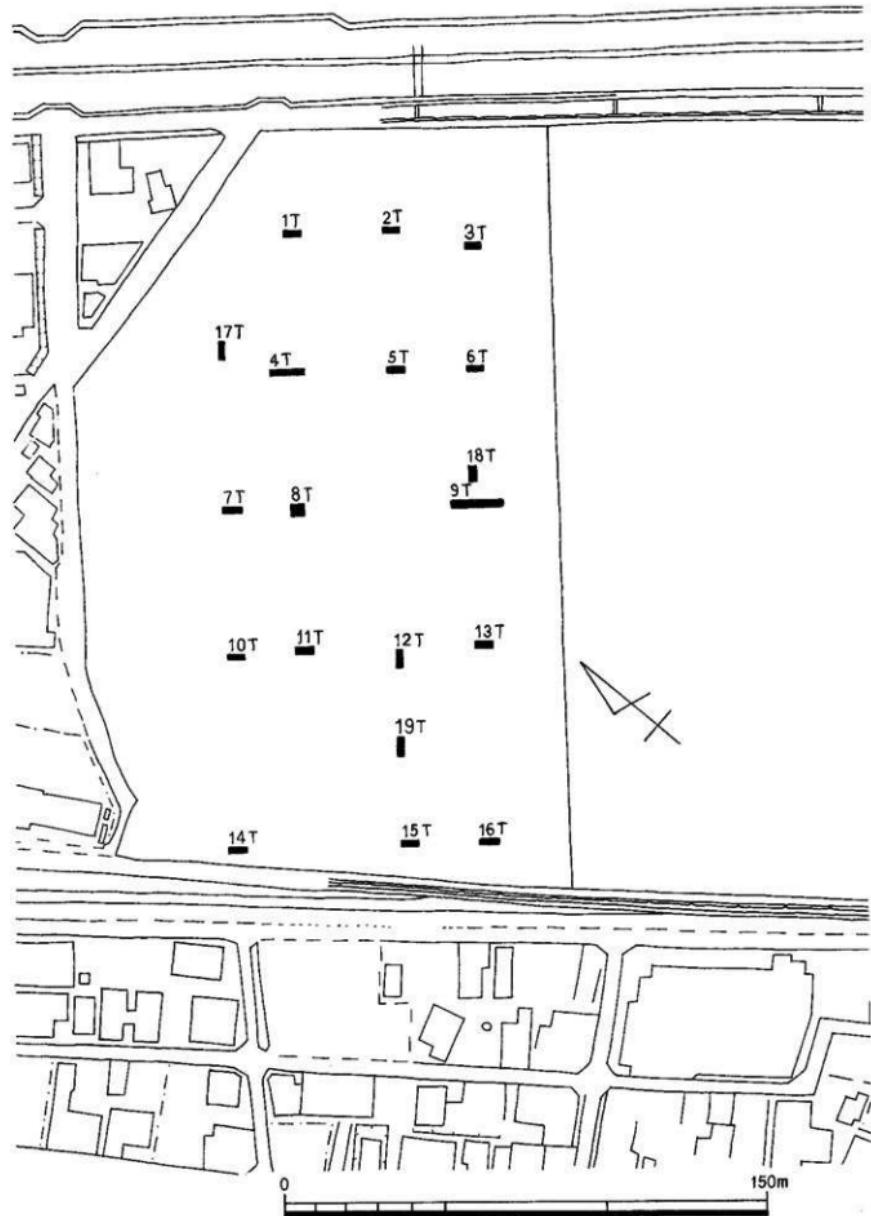


1 JR東加古川駅北区試調査地 2 野口廃寺 3 野口城跡 4 古大内遺跡 5 古大内城跡
6 横倉城跡 7 長畠遺跡 8 一色構居跡 9 山之上遺跡 10 古代山陽道

第1図 周辺遺跡分布図



第2図 試掘調査位置図



第3図 トレンチ配置図

参考文献

『加古川市史』第4巻 1996年

2. 調査の概要

調査は平成15年9月3日から10月2日まで実施した。トレンチは基本的に $2\text{m} \times 5\text{m}$ の大きさで、当初16箇所掘削したが、その後兵庫県教育委員会の現地指導により第17トレンチと第18トレンチ、第19トレンチをさらに3箇所を追加し、合計19箇所を掘削した。調査地内には、コンクリートやアスファルトが敷かれている箇所が散在するため、トレンチの配置が等間隔になっていない所がある。また、同様の理由から第12トレンチのように方向が異なるトレンチが若干存在する。また、第4トレンチは $2\text{m} \times 10\text{m}$ 、第9トレンチは $2\text{m} \times 15\text{m}$ に延長して調査を行った。第2トレンチは、厚いコンクリートにあたったため、それ以上掘削することはできなかった。

土地は第1、2、3トレンチなどが配置された北東側で、 $19\text{m} \sim 19.5\text{m}$ と最も高く、第6～13トレンチでは $18.6\text{m} \sim 18.9\text{m}$ 、南西端の第14～16トレンチでは $17.4\text{m} \sim 17.8\text{m}$ と南西側に行くに従い低くなる。

各トレンチの土層の状況は第4図土層断面模式図に記すとおりである。第1、3、7、9、10、13、15、16、17、18トレンチでは、盛土層の下は概ね黄色ないし灰白色シルト質細砂などが堆積していた。盛土層は場所によりかなりの厚みがあり、第15トレンチでは、約1.4mあった。また、表土層となる盛土層(盛土1)の下層に、地山土と旧耕作土層のブロック層である盛土2が存在するトレンチがかなりあり、この地を整地する際に高い箇所から切土して盛土としたのではないかと思われた。

第2層以下の黄色ないし灰白色土層は均質な細砂層であり、これらは日岡段丘の堆積層と考えられる。

また、第4、5、6、8、11、12トレンチでは、各トレンチにより差異があるが、概ね第1層 盛土層、第2層 暗灰色砂質土、第3層 黄色ないし灰色シルト質細砂(部分堆積)、第4層 青灰色、暗青灰色、明青灰色ないし緑灰色シルト質細砂層となる。

これらのトレンチは台地の堆積層とは様相が大きく異なっており、低地の堆積層と考えられる。

これらの状況から、第7、10、17トレンチや第9、13、15、16、18トレンチなどの台地層の間に、第4、5、6、8、11、12トレンチなどの低地層が堆積する谷状の地形が存在したのではないかとも思われる。

調査全体を通して明確な遺構はひとつも検出されなかった。遺物は第4トレンチの暗灰色砂質土層の中から、染付磁器の細片が数点出土したが、他の層の中からはまったく出土しなかった。

今回調査地の南東側隣接地である約10ヘクタールの土地についても、平成15年4月に $2\text{m} \times 5\text{m}$ の試掘トレンチを42箇所設定して調査を行ったが、遺構・遺物ともに発見さ

れなかった。

各トレンチにおいて、遺構・遺物ともに発見されなかつたため、調査地内に埋蔵文化財が存在する可能性は低いと考えられる。



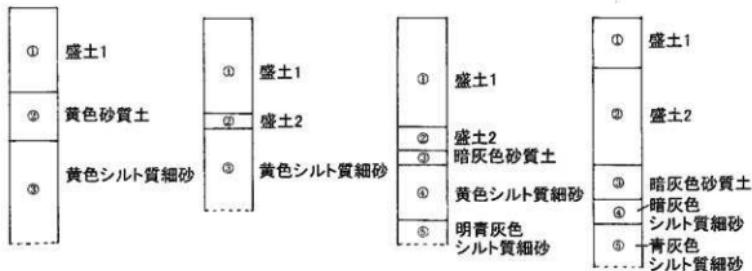
第4図 土層断面模式図

第9トレーンチ

第10トレーンチ

第11トレーンチ

第12トレーンチ

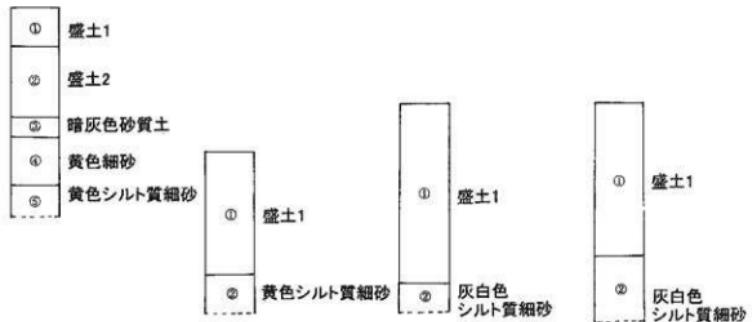
20.0m19.018.017.0

第13トレーンチ

第14トレーンチ

第15トレーンチ

第16トレーンチ

20.0m19.018.017.016.0

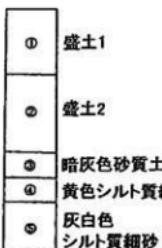
20.0m

第17トレーンチ

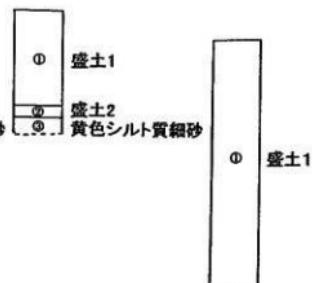
第18トレーンチ

第19トレーンチ

19.0



18.0



17.0

平津構居跡発掘調査報告書

平津構居跡発掘調査報告書

調査場所	加古川市米田町平津552他
調査機関	加古川市教育委員会 生涯学習推進室
調査期間	平成8年11月20日～平成9年1月23日
調査面積	116m ²
調査員	西川 英樹

1. はじめに

平津構居跡は、中世の城館跡と伝えられている遺跡である。『増訂印南郡誌』には「領主は詳かならず。今平津村字高畠の西南部に其趾遺れり。約三段歩の広さありて周囲に2間幅の堀回れり。近年本陣趾を崩して水田となし堀の一部を埋めたり。領主に関し前郡志には、衣笠一郎石衛門の構居址地との伝説ありと註したれど、その出所を詳にせず。赤松大系譜によれば季則の末孫に成澄なる者ありて、石原三郎成澄 平津左膳と称す。紋三つ杉、志方の家人也と註せり。即ち石原氏の構居址なるべきか。成澄の姪(弟澄門の子)に雪女なる者あり。米田大膳則親に嫁したり。」との記述があるが、現在においては堀跡はすでに無く、構居跡の実態は不明である。

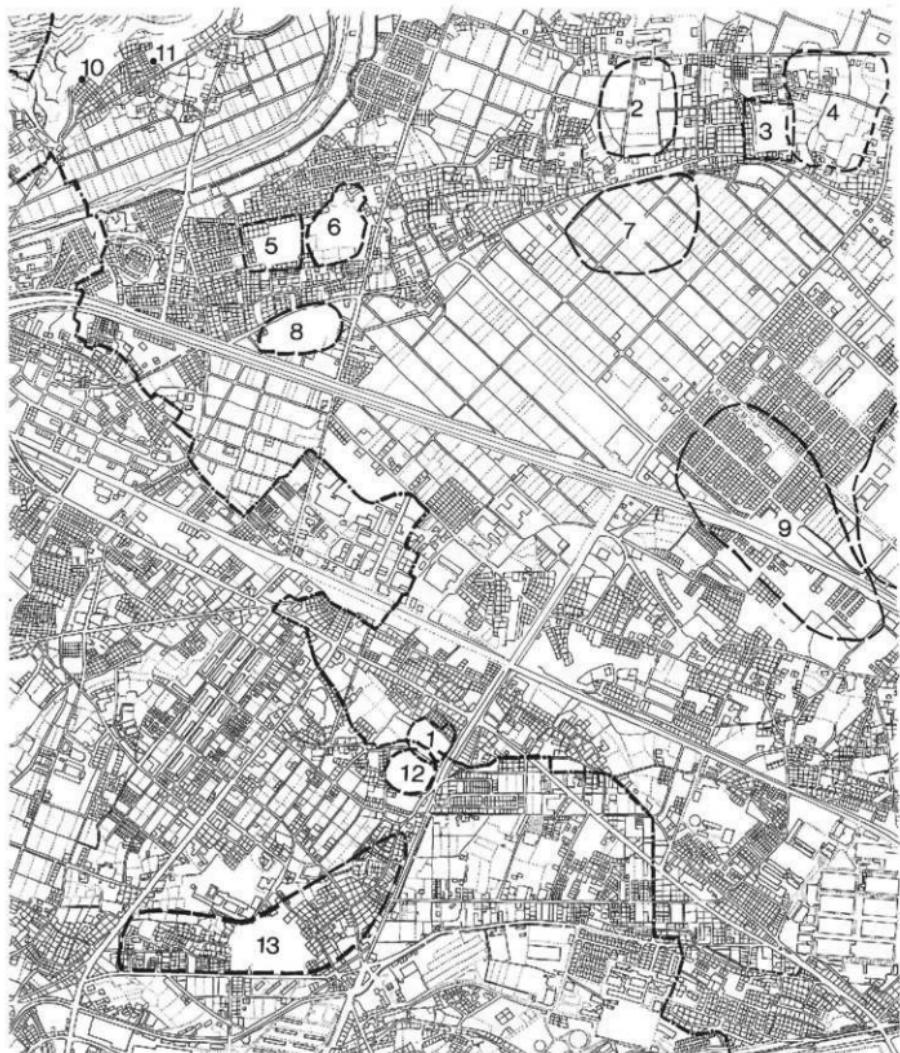
また、多田暢久氏は「加古川周辺の城と構居(1)平津構居」において、国道2号線周辺と字高畠および大歳神社周辺の3箇所を候補とした。同論文によれば、地元では、国道2号線周辺を城の跡と伝えている。また、字高畠は地形的に一番主郭らしいが、郡誌・口碑と一致しない所があり、主郭と断定できない。大歳神社は周囲の土地が全体的に西側が東側より高くなっていること、境内とその西側の水田との高低差があまりなく、主郭とは考えにくく、出丸的な郭と考えられるとされている。

今回、遺跡想定範囲内の耕作地において、土地区画整理事業が計画されたため、事前に範囲確認調査を国庫補助事業により実施した。調査地は候補地の一つである大歳神社周辺を含む水田地域で、主に字高畠や国道2号線よりは南側の土地である。調査地は加古川市と高砂市にまたがるため、高砂市側の農地は高砂市教育委員会が先行して調査を行った。調査地の大部分は加古川市側に属する。今回の報告書では、加古川市側の成果を報告する。

2. 位置と環境

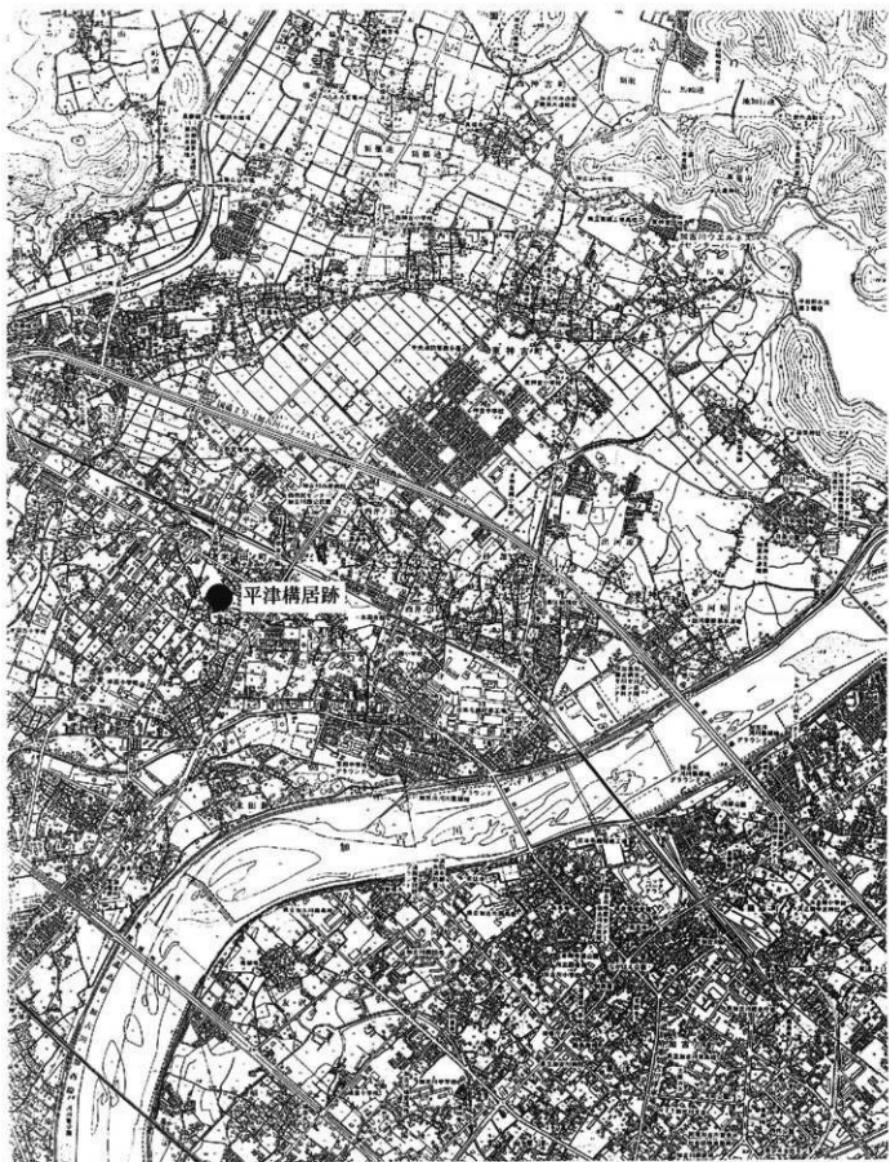
調査地は、加古川西岸に位置し、JR宝殿駅から南側に約400m程度離れている。

調査地の米田町とその周辺には、加古川の氾濫原が広がっており、旧河道と微高地がありなす地形である。氾濫原の微高地上には遺跡が点在し、北側には縄文時代晩期～古



- 1 平津構居跡 2 西村遺跡 3 中西庵寺 4 中西台地遺跡 5 岸遺跡
6 岸城跡 7 中西低地遺跡 8 岸南遺跡 9 東神吉遺跡 10 汗 2号墳
11 汗 3号墳 12 平津遺跡 13 米田遺跡

第5図 周辺遺跡分布図



第6図 平津構居跡位置図

墳時代の集落跡である砂部遺跡や、弥生時代前期と後期の遺構が検出された東神吉遺跡などが存在する。南側の微高地上には、弥生時代～中世の遺跡である米田遺跡が存在する。また、調査地の北側から国道2号線方面にかけても、微高地が広がっている。

氾濫原の北側には、長く弧を描いてのびる段丘が存在する。その南側縁辺部には、绳文時代晚期の土器片及び弥生時代前期前半の土器が出土した岸遺跡や、弥生～奈良時代の集落跡である西村遺跡、弥生・奈良～近世の遺跡である中西台地遺跡などが存在する。中西台地遺跡の西側には、奈良時代前期創建と見られる中西廃寺が存在する。伽藍配置は不明であるが、単弁八葉蓮華文軒丸瓦などの瓦類が採集されているほか、巨大な自然石の表面に円形孔をくり込んだ塔心礎や、欄柱の礎石と思われる礎石群なども残されている。また、塔の露盤と刹が、近隣の「石井の清水」の井戸枠として使用されている。

周辺の構造跡としては、当遺跡の北東側に砂部構造跡が存在するが、実態は不明である。また、北側には岸城跡が存在するが、これも実態不明である。東神吉町神吉には、台地上に神吉城跡が存在する。この城は神吉氏の居城で、天正6年(1578)7月に、織田氏の攻撃を受けて落城したことは有名である。現在の常楽寺付近を中の丸跡、真宗寺付近を西の丸跡と伝えている。

3. 調査の成果

調査地に2m×2mの試掘坑22ヶ所と2m×4mの試掘坑を3ヶ所設定して、調査を実施した。主要な試掘坑の層序は以下のとおりである。

試掘坑1 第1層現代耕作土層、第2層灰色粘質土層、第3層褐色粘質土層、第4層灰黄色粘質土層。

試掘坑2 第1層現代耕作土層、第2層浅黄色粘質土層、第3層暗灰黄色粘質土層、第4層黄褐色粘質土層、第5層暗灰黄色砂層。

試掘坑3 第1層現代耕作土層、第2層灰色粘質土層、第3層黄色粘質土層、第4層灰白色粘質土層、第5層にぶい黄褐色粘質土層、第6層灰色粘質土層、第7層暗褐色粘質土層、第8層黄褐色粘質土層。

試掘坑6 第1層現代耕作土層、第2層浅黄色粘質土層、第3層暗褐色粘質土層、第4層にぶい黄褐色粘質土層。

試掘坑7 第1層現代耕作土層、第2層浅黄色粘質土層、第3層灰色粘質土層、第4層暗褐色粘質土層、第5層浅黄橙色粘質土層、第6層黄褐色粘質土層、第7層暗灰黄色砂層。

試掘坑8 第1層現代耕作土層、第2層灰色粘質土層、第3層暗褐色粘質土層、第4層灰色粘質土層。

試掘坑9 第1層現代耕作土層、第2層浅黄色粘質土層、第3層灰色粘質土層、第4層灰色粘質微砂層、第5層黄橙色粘質土層、第6層褐灰色粘質土層、第7層灰色粘質土層、第8層灰白色粘質土層、第9層灰色粘質土層。

- 試掘坑10 第1層現代耕作土層、第2層淡黃色粘質土層、第3層灰色粘質土層、第4層橙色粘質土層、第5層淺黃橙色粘質土層。
- 試掘坑11 第1層現代耕作土層、第2層淺黃色粘質土層、第3層灰色粘質土層、第4層暗褐色粘質土層。
- 試掘坑12 第1層現代耕作土層、第2層淺黃色粘質土層、第3層灰色粘質土層、第4層暗褐色粘質土層。
- 試掘坑14 第1層現代耕作土層、第2層灰白色砂質土層、第3層黃橙色粘質土層、第4層灰白色粘質土層、第5層灰色粘質土層、第6層黃褐色粘質土層、第7層灰白色粘質土層。
- 試掘坑15 第1層現代耕作土層、第2層灰白色砂質土層、第3層黃橙色粘質土層、第4層灰白色粘質土層。
- 試掘坑16 第1層現代耕作土層、第2層灰白色砂質土層、第3層黃橙色粘質土層、第4層淺黃色粘質土層、第5層灰色粘質土層、第6層黃褐色粘質土層。
- 試掘坑18 第1層現代耕作土層、第2層灰白色砂質土層、第3層黃橙色粘質土層、第4層淺黃色粘質土層、第5層灰色粘質土層。
- 試掘坑20 第1層現代耕作土層、第2層灰白色砂質土層、第3層淺黃色粘質土層、第4層灰白色粘質土層、第5層黃橙色粘質土層、第6層灰黃褐色粘質土層、第7層灰色粘質土層、第8層灰白色粘質土層、第9層灰色粘質土層、第10層明青灰色粘質土層、第11層青灰色粗砂層。
- 試掘坑21 第1層現代耕作土層、第2層灰白色砂質土層、第3層淺黃色粘質土層、第4層灰色粘質土層、第5層黃橙色粘質土層、第6層灰黃褐色粘質土層、第7層灰色粘質土層、第8層灰白色粘質土層。
- 試掘坑22 第1層現代耕作土層、第2層灰白色砂質土層、第3層淺黃色粘質土層、第4層灰色粘質土層、第5層暗灰色粘質土層、第6層灰黃褐色粘質土層、第7層灰色粘質土層。
- 試掘坑23 第1層現代耕作土層、第2層灰白色砂質土層、第3層黃橙色粘質土層、第4層灰黃褐色粘質土層、第5層にぶい黃橙色粘質土層、第6層灰白色粘質土層。
- 試掘坑25 第1層現代耕作土層、第2層灰白色砂質土層、第3層黃橙色粘質土層、第4層灰黃色粘質土層、第5層灰色粘質土層。
- 調査地の現況はすべて水田である。地形は、北東側から南西側にかけてゆるやかに低くなっている。すなわち、坑6、7、14、15、20、21までの調査区北東側では約3.1m～3.3mと最も高い。坑6から坑12方向にかけては、南西方向に向けて、水田が少しづつ低くなっているが、南側の坑12付近で、約2.7mであり、その高低差は40cm～50cm程度である。一方、大歳神社付近の調査地東側では、坑6、8を掘削した水田に対して、坑2、3、4を掘削した水田は、約40cm程度低くなっている。
- 遺構(第8図、写真図版5～8)は、坑6の第4層上面において、柱穴状遺構を1基検

出した。長辺約58cm、短辺約48cmの方形の平面形となり、柱痕は径約22cm～24cmで、深さ約20cmであった。堆上より、須恵器蓋の細片が1点出土した。坑8では、第4層上面で東西方向の溝1を検出した。最大幅約60cm、最小幅約16cm、深さ約8cmで、東側では幅があるが、西側では細くなる。埋土は黒褐色粘質土であった。遺物は出土しなかった。また、径約40cm～50cmのだ円形のピット3基を検出したが、いずれも遺物は出土しなかった。坑10では、第5層上面において、幅約60cm、深さ約8cm～10cmの溝2を検出したが、遺物は出土しなかった。埋土は灰色粘質土であった。

遺物(第10図、写真図版9・10)は大半が細片であり、各時期の資料が混在している。今回の報告では28点の資料を図示したが、これがすべての資料ではなく、図示できない物も含めて多数の遺物が出土している。

1は須恵器蓋口縁部の細片である。端部を下方へ屈曲させている。細片のため、口径は復元できない。坑6、第2層から出土した。2は弥生土器の壺底部である。底径は7.9cm、色調はぶい橙色となる。坑6、第2層から出土した。3は回転糸切平高台の須恵器腕片である。体部はやや内湾ぎみに立ちあがる。上部は欠失している。底径は6.2cm、色調は灰白色となる。4は、須恵器杯身の口縁部の破片である。立ち上がりは短小で内傾し、端部はすこしがり気味となる。細片のため口径は復元できない。5は、弥生土器の底部である。底径は11.0cm、色調は灰白色となる。内外面摩滅している。6は須恵器杯蓋である。口縁部は回転ナデ、天井部外面に回転ヘラ削りを施す。口径は14.8cm、色調は灰色である。口縁端部は丸く收める。7は稜挽である。口径16.3cm、器高5.1cm、高台径9.8cm。体部に明瞭な稜をもつ。底部外面をヘラ削りする。色調は灰白色である。8、9は土師質の棒状有孔臼鍤である。8は残存長5.1cm、孔径は6mm、9は残存長7.2cmで、孔径は6mmである。10は須恵器蓋口縁部片である。扁平な形で、端部を下方に屈曲させる。細片のため、口径は復元できない。11は須恵器杯身片である。受部は外上方にのび、立ち上がりは内傾し、端部を丸く收める。細片のため、口径は復元できない。12は弥生土器底部である。底部は突出し、外面に指頭圧痕が残る。底径は6.8cmである。色調は灰白色である。表面が摩滅している。13は弥生土器の壺底部である。底径は6.8cmである。色調は灰白色である。表面が摩滅している。3～13は、坑6の第3層から出土した。14は須恵器蓋細片である。端部を下方に屈曲させている。細片のため、口径は復元できない。坑6第4層上面で検出された柱穴状遺構の埋土から出土した。15は弥生土器底部である。底径8cmである。坑7第4層から出土した。16は須恵器蓋口縁部片である。端部を下方へ屈曲させ、丸く收める。細片のため、口径は復元できない。色調は灰白色である。坑8第3層より出土した。17は須恵器杯蓋片である。かえりをすこし残している。外面に濃緑色の自然釉が付着する。細片のため、口径は復元できない。色調は灰白色である。坑10の層中より出土した。18は杯Bと思われる須恵器の底部である。すこし外方に開く輪高台を貼り付けている。焼成は軟質で、色調は灰白色である。内外面摩滅している。高台径は10cmである。坑10第3層より出土した。19は杯Aである。口径

は13cm、器高3.3cm、底径8.4cmである。体部は内外面回転ナデ、底部はヘラ切り後、ナデ調整する。外面に火摺痕がある。色調は灰白色である。坑12第4層より出土した。20は弥生土器底部である。底径は3.2cmと小さい。21は土師質土錐である。残存長2.2cm、孔径0.6cmである。19~21は坑12第4層から出土した。22は杯蓋である。口径は15.2cmである。天井部を欠いている。23は須恵器壺底部である。高台径は9.6cmである。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に開く。高台外面に濃緑色の自然釉が付着する。24は土師質の管状土錐である。残存長4.8cm、孔径0.6cmである。25は杯Aである。口径13.5cm、器高2.7cm、底径8.4cmである。底部は平らで、体部との境は明瞭である。体部は回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ調整である。色調は灰白色である。26は土師器壺口縁部である。端部に面をもつ。外面下部にタテハケメが残る。27は杯身の細片である。受部は外方にのびる。立ちあがりは内傾し、端部は丸く收める。坑21第5層より出土した。28は、平瓦の破片である。坑7第3層より出土した。凹面に布目が残る。凸面は大きく剥離している。

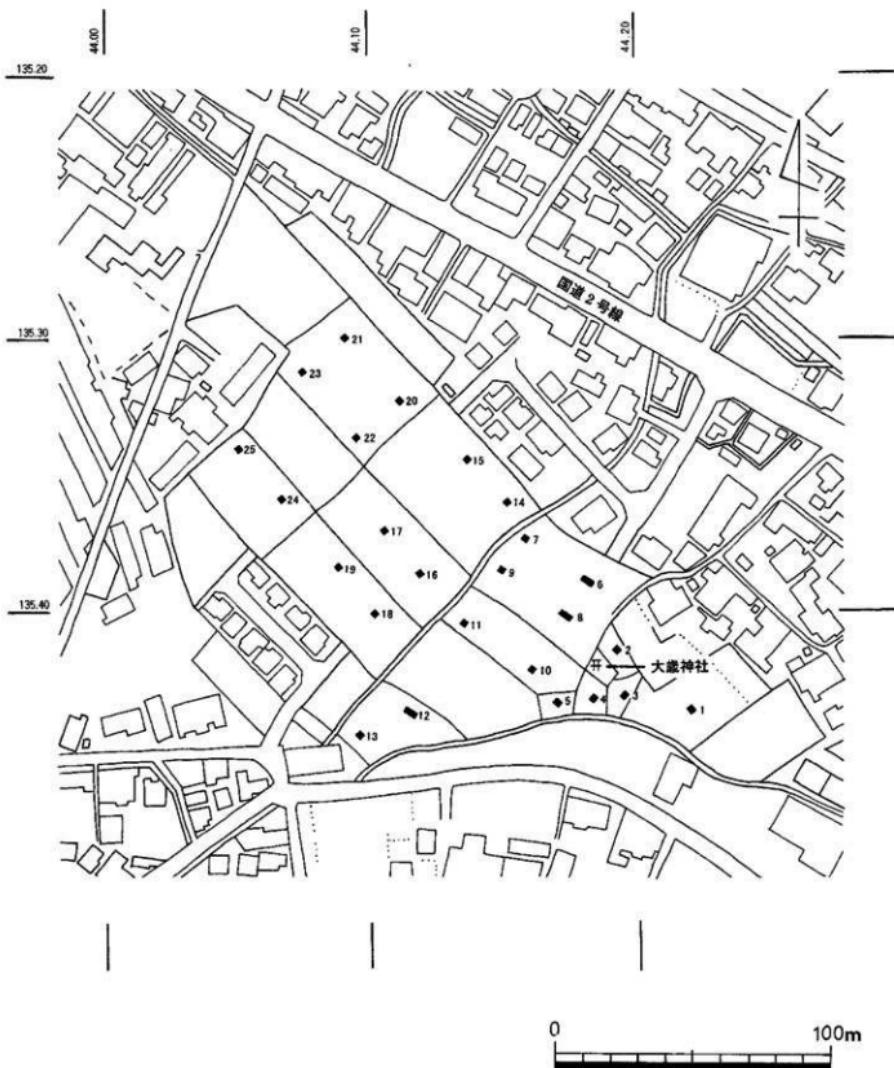
4. まとめ

範囲確認調査の結果、主に弥生時代~奈良時代の土器細片を含む暗褐色粘質土層が坑6~8、11、12にわたって堆積していることが確認された。この層から出土した遺物には、稜楕なども含まれているが、遺構は無く、遺物の大半が細片で、時代幅も大きいことから2次堆積と思われる。坑6では、4層上面から、柱穴状遺構が1基検出された。埋土からは、須恵器蓋口縁部の細片が1点出土している。そのほかにも、坑8、10で、溝やピットが検出されたが、遺物は出土しなかった。

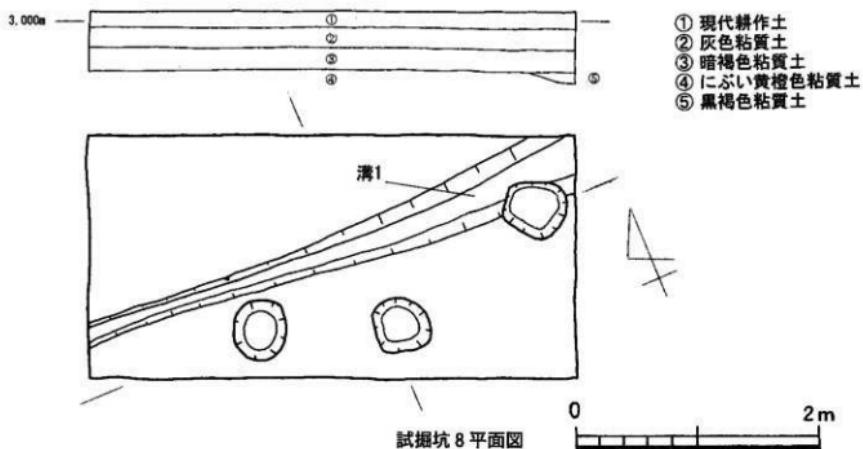
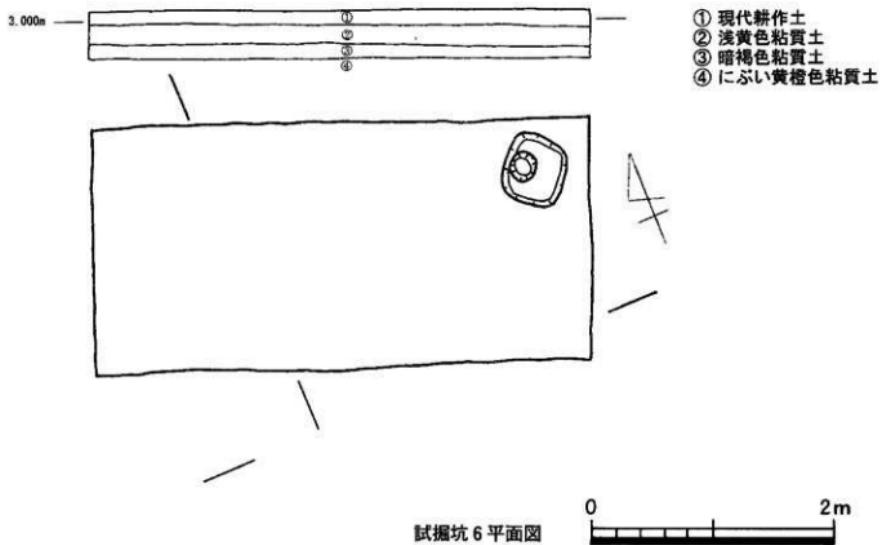
現在、加古川市教育委員会は大歳神社に、平津構居跡の標柱を立てているが、この神社周辺の調査区からは、顕著な遺構は検出されなかった。調査地全体においても、平津構居跡にともなうと思われる遺構・遺物は、まったく出土しなかった。限定的な確認調査であるため断定はできないが、これらの状況から、調査地内に構居跡が存在する可能性は低いと思われる。一方、今回の調査により、細片ではあるが、主に弥生時代~奈良時代の遺物が一定量出土しており、今後の周辺地の調査に注意を要する結果となった。

参考文献

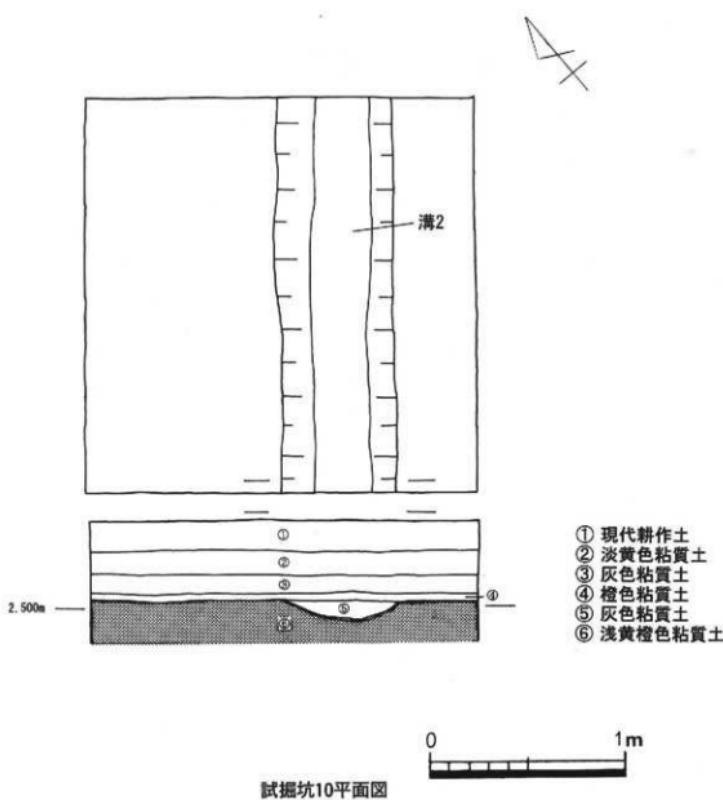
- 田中真吾 「加古川市の自然」『加古川市史第4卷』1996年
多田暢久 「加古川周辺の城と構居(=平津構居)」『鹿児第66号』1981年

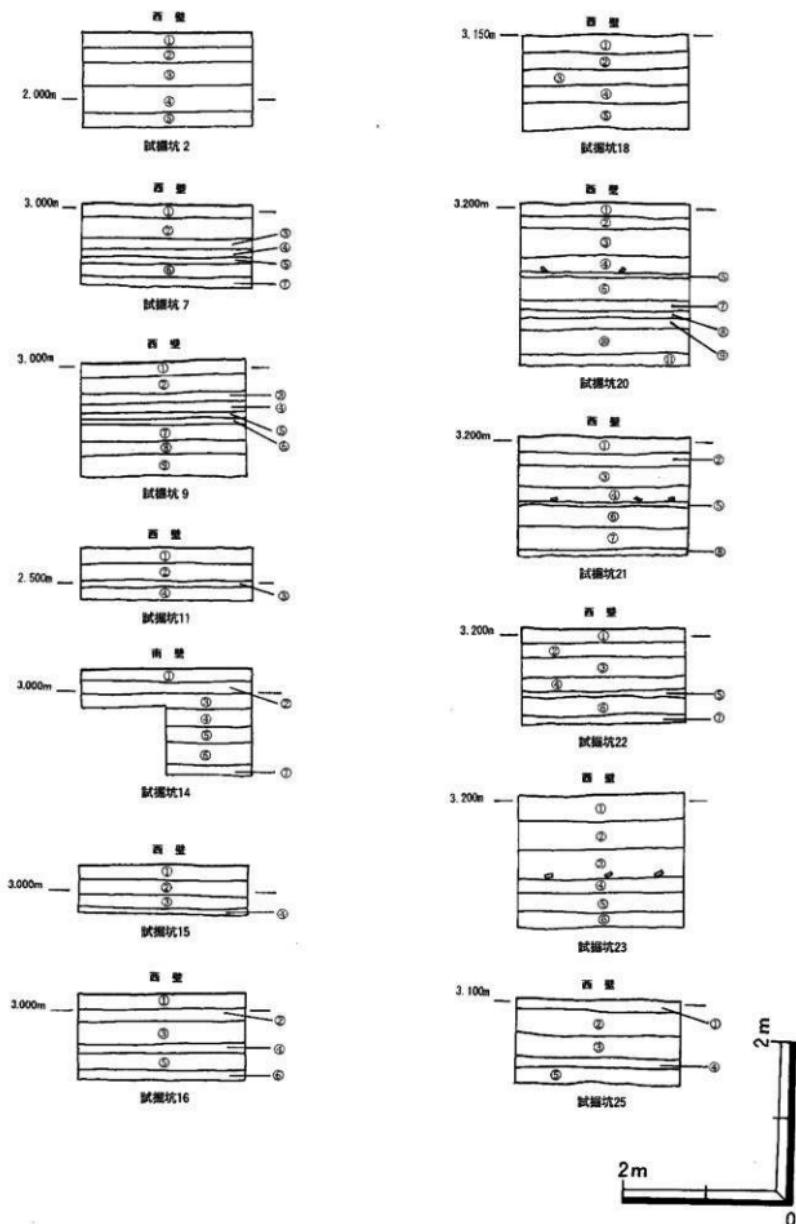


第7図 調査区設定位置図

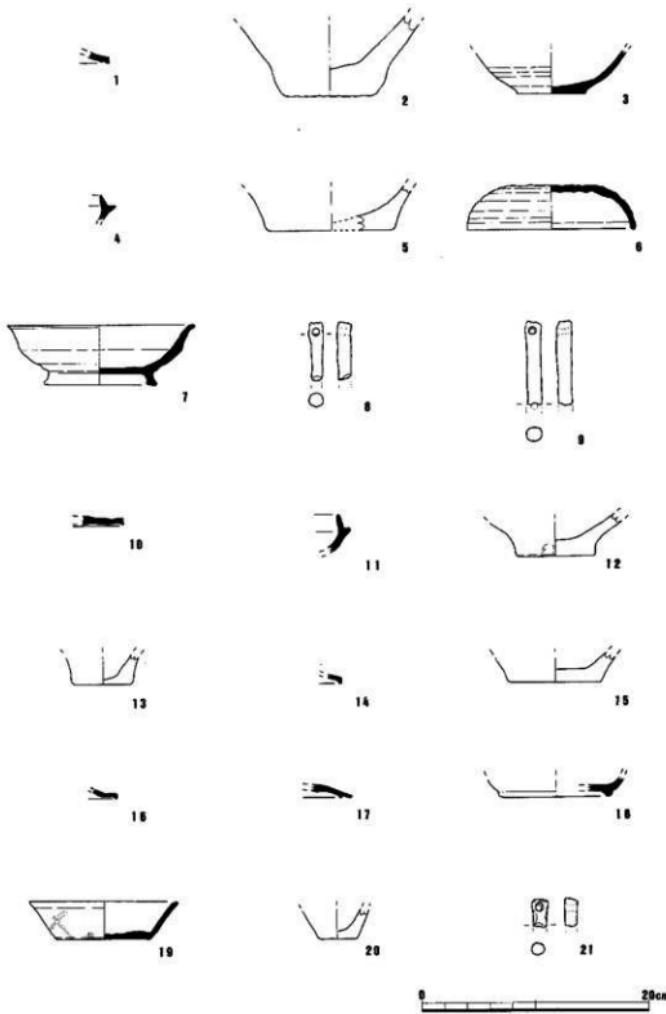


第8図 平津構居跡遺構平面図





第9図 平津構居跡土層断面図



平津構居跡出土土器実測図

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1(試掘坑6第2層) | 2(試掘坑6第2層) |
| 3~10(試掘坑6第3層) | 11~13(試掘坑6第3層) |
| 14(試掘坑6柱穴造構埋土) | |
| 15(試掘坑7第4層) | 16(試掘坑8第3層) |
| 17(試掘坑10) | 18(試掘坑10第3層) |
| 19~21(試掘坑12第4層) | |

第10図 出土遺物実測図



22



23



24



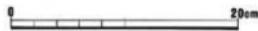
25



26



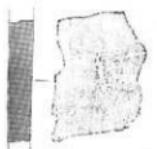
27



22~24(試掘坑13第5層)

25・26(試掘坑14第5層)

27(試掘坑21第5層)



28



28(試掘坑7第3層)

溝之口遺跡平成11年度第1次発掘調査報告書

溝之口遺跡平成11年度第1次発掘調査報告書

調査場所 加古川市加古川町溝之口1-1
調査機関 加古川市教育委員会 生涯学習推進室
調査期間 平成11年7月12日～平成11年8月6日
調査面積 60m²
調査員 西川 英樹

1.はじめに

溝之口遺跡は、昭和42年の加古川バイパス建設工事によって発見された、弥生時代～平安時代の集落跡である。弥生時代は、Ⅲ・Ⅳ期が中心となり、加古川左岸における複点集落と考えられている。また、古墳時代後期～奈良時代にかけても、多くの遺構・遺物が出土しており、墨書き器や木簡、布目瓦などが出土している。

今回の調査は、加古川バイパス北側の水田において、個人の開発にともない、国庫補助事業により発掘調査を実施した。

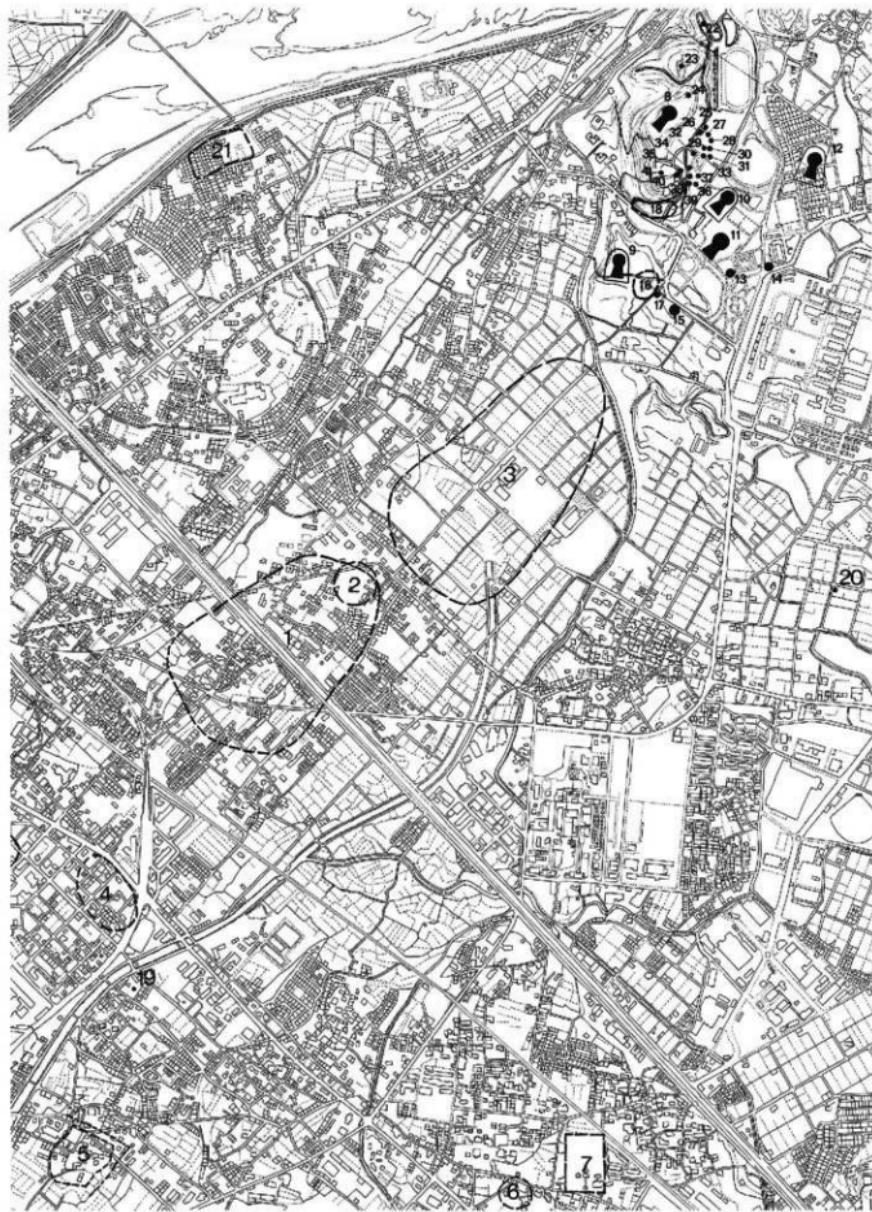
2.位置と環境

溝之口遺跡が所在する加古川町は、その大部分が加古川東岸の沖積平野、氾濫原、旧河道があり成す地形である。溝之口遺跡は微高地上に立地し、弥生時代～平安時代の集落跡である。加古川町域では、このほかにも、微高地上に多数の集落跡が営まれた。

周辺の遺跡について概観すると、まず、北東側に隣接する美乃利遺跡は、平成2、3年に、兵庫県教育委員会による発掘調査が実施された、弥生時代～鎌倉時代の複合遺跡である。特に、弥生時代前期の水田跡が大規模に検出されたことが注目される。また、大野遺跡からは、平安時代～室町時代の集落跡が検出された。さらに北東側の日岡丘陵上には、5基の前方後円墳を主とする、日岡山古墳群が形成されている。一方、南側では、坂元遺跡、平野遺跡、北在家遺跡、栗津遺跡、良野遺跡などの集落跡が、段丘上や微高地上に点在する。坂元遺跡は、平成12年に兵庫県教育委員会による調査が実施され、弥生時代～奈良時代の遺構が検出された。

3.調査の成果

開発予定地に、約8m×約7.5mの調査区を設定して、調査を行った。基本層序は第1層現代耕作土層、第2層淡黄色砂質土層、第3層暗褐色粘質土層、第4層黄色粘質土層となっていた。第3層は精査したが、遺構は検出されなかった。遺物は層中から細片が少量出土した。時期的には、弥生土器、土師器、須恵器(糸切平高台の椀底部片を含む)



第11図 周辺遺跡分布図

1	溝之口遺跡	22	日岡山1号墳
2	溝之口廃寺	23	日岡山2号墳
3	美乃利遺跡	24	日岡山3号墳
4	平野遺跡	25	日岡山4号墳
5	細田構居跡	26	日岡山5号墳
6	野口城跡	27	日岡山6号墳
7	野口廃寺	28	日岡山7号墳
8	ひれ墓古墳	29	日岡山8号墳
9	勅使塚古墳	30	日岡山9号墳
10	西大塚古墳	31	日岡山10号墳
11	南大塚古墳	32	日岡山11号墳
12	北大塚古墳	33	日岡山12号墳
13	西車塚古墳	34	日岡山13号墳
14	東車塚古墳	35	日岡山14号墳
15	狐塚古墳	36	日岡山15号墳
16	日岡山遺跡	37	日岡山16号墳
17	日岡山壺棺墓	38	日岡山17号墳
18	日岡山遺跡	39	日岡山18号墳
19	具平塚古墳	40	日岡山19号墳
20	水足1号墳	41	日岡山20号墳
21	中津構居跡		

第1表 溝之口遺跡周辺遺跡分布図地名表



第12図 溝之口遺跡位置図

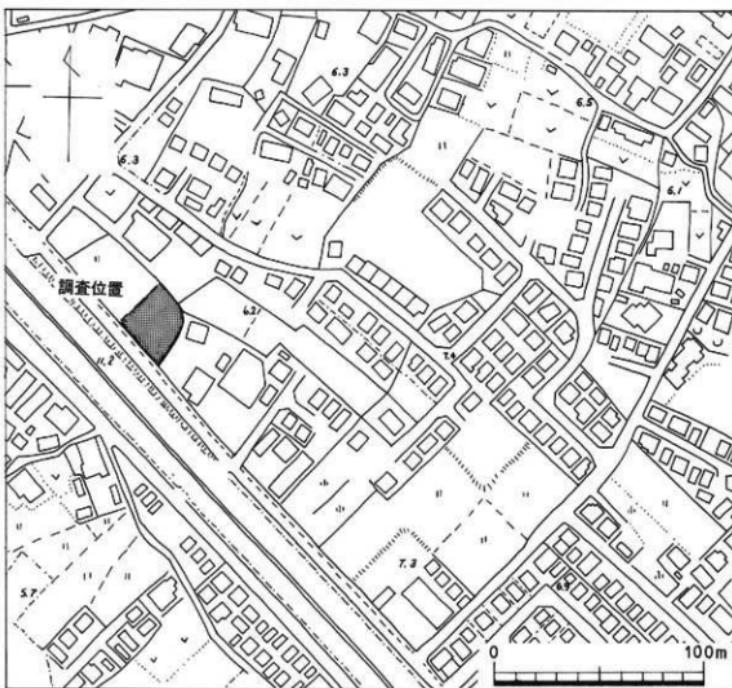
など各時期の土器細片が混在している。

遺構は、第4層上面が検出面であり、溝や土壙などが検出された。遺物は細片が多いが、量的には多く出土した。

溝1は、北方向から南方向に流れ、断面は逆台形となる。検出長約11m、幅約3.9m、深さ約75cmとなる。遺物としては、杯Bの身および土師器壺口縁部がそれぞれ1点下層より出土した。

溝2は、検出長約4.9m、幅約55cm、深さ約38cmである。南側に隣接して、溝状遺構がある。また、南側の一部に、幅約40cmほどのと切れた箇所がある。西端は溝1に切られている。遺物は出土していないため、時期は不明である。

溝状遺構は、溝2の南側に沿う形で検出された。調査区の南端にかかっているため、全体の形状は知り得ない。検出状況から溝かと思われたが、大形の土壙などの可能性もあるため、ここでは溝状遺構としている。検出長約7.9m、検出幅約1m～2m、深さは最も深い部分で、約54cmである。埋土を観察すると、溝2の一部を、溝状遺構が切っているため、溝状遺構のほうが、溝2より新しい時期の遺構と考えられる。また、西端は



第13図 発掘調査位置図

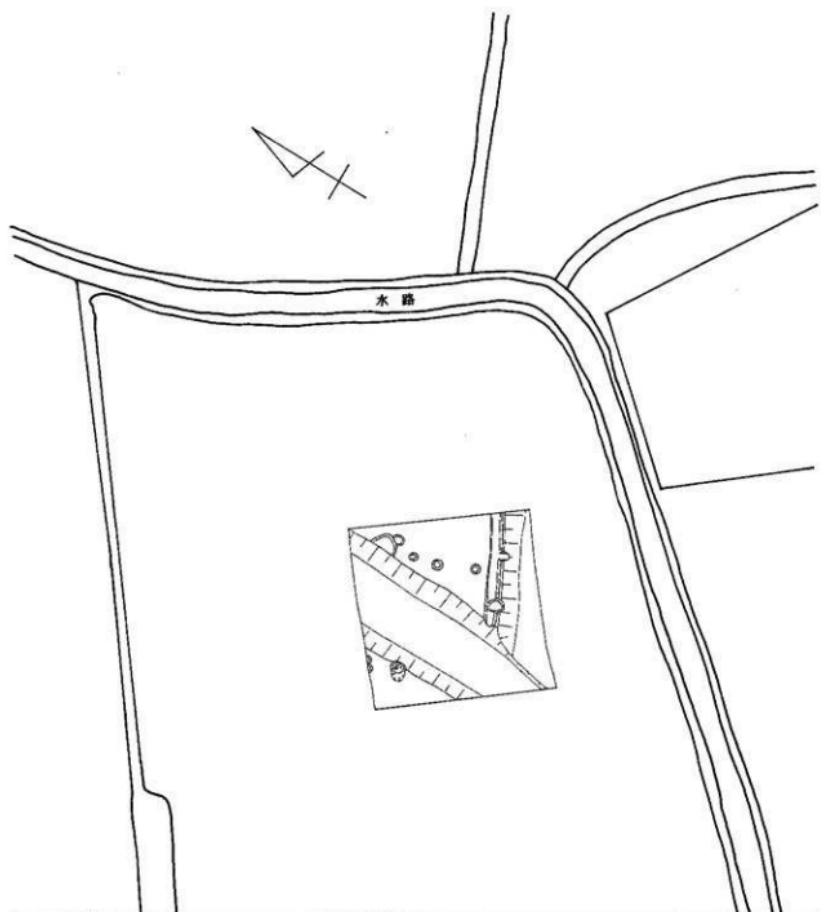
溝1によって切られており、これよりは古い造構である。遺物は小片であるが、他の造構に比べて多く出土した。時期的には、弥生時代中期後半の土器から、須恵器口縁部の破片まで各時期の土器が混在するが、弥生後期の土器が多くを占めている。

ピット1は、長径約90cm、短径約60cm、深さ約32cmで、いびつな梢円形を呈する。溝1に東側の一部が切られている。遺物は、弥生土器甕と底部片がそれぞれ1点出土したのみである。この他にも、8基のピットが検出されているが、いずれも遺物がなく、時期は不明である。

遺物は細片が多く、図示できなかったものもある。1は杯Bである。口径13.6cm、器高4.6cmとなる。高台径8.3cmである。色調は暗灰色を呈する。底部周縁近くに、高台を貼りつける。体部から口縁部は、回転ナデ調整である。2は土師器甕口縁部である。口縁端部は面を持たず、丸く收めている。口縁部内面に横ハケを施している。色調は淡黄色を呈する。1、2は、ともに溝1の下層から出土した。3～6は、弥生土器甕口縁部である。3は口径15cmで、口縁部と体部の境に、右上がりタタキメがわずかに残る。4は口径17cmで、端部は面を持たず、丸く收める。色調は淡黄色を呈する。5は口縁叩き出し手法を用い、口縁部外面下部から体部にかけて、右上がりタタキメが残る。端部には面を持たない。内面の調整は横ナデである。色調は黄褐色である。6は口縁叩き出し手法を用い、口唇部横ナデ手法により、あまい面をつくっている。口縁部下部から体部にかけて右上がりタタキメが残る。7～28は、弥生土器の底部ないし底体部である。7は底径2.8cm、残存高3.6cmで、外面に継ヘラミガキの痕跡がわずかに残る。色調は淡黄色を呈する。8は底径5cm、残存高4.0cmで、外面に右上がりタタキを施す。木葉底である。色調は褐色となる。9は底径5cmで、ドーナツ底となる。外面に右上がりタタキを施す。10は底径4.2cmである。内外面をハケ調整する。底面上げ底となる。11は底径4cmである。底部外面に、右上がりタタキを施す。色調は淡黄色を呈する。12は底径5cmで、底部外面に指頭圧痕が残る。色調は浅黄橙色を呈する。13は底径2.4cmで、色調は外面灰白色、にぶい橙色、内面は灰白色を呈する。14は底径4.6cmで、色調は外面浅黄橙色、内面褐灰色である。内外面摩滅のため、観察しにくい。15は底径4cm、残存高2.4cmで、底面は上げ底となる。色調は淡黄色を呈する。16は底径4.8cm、残存高2.8cmで、内外面摩滅している。17は底径4.7cm、残存高3.0cmで、外面はナデ、内面にはハケメが残る。色調は暗灰色を呈する。18は底径3.8cm、残存高2.5cmで、外面に右上がりのタタキを施している。19は底径3.0cm、残存高2.8cmで、色調は淡黄色である。20は底径5.0cm、残存高3.0cmで、内外面摩滅している。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が黒褐色である。21は底径4.4cm、残存高5.6cmで、外面はヘラミガキがわずかに残る。色調は外面淡黄色、内面暗灰色である。22は底径5.0cm、残存高3.5cmで、わずかに上げ底となる。色調は外面灰白色、内面橙色である。23は脚台の付く底部で、外面に指押さえ痕が残る。底径3.6cm、残存高2.7cm、外面赤褐色、内面黄橙色である。24は底径3.8cm、残存高3.0cmで、わずかに上げ底となる。外面はわずかにハケメが残る。色調は外面灰白色、内面

灰褐色となる。25は底径4.2cm、残存高3.4cmで、底面は木葉底である。外面に右上がりタタキメが残る。色調は外面灰白色、内面は浅黄橙色を呈する。26は底径4.6cm、残存高2.0cmで、外面の調整はハケ、内面はナデ調整とする。色調は内外面褐色を呈する。27は底径4.6cm、残存高2.4cmで、底部上げ底となる。外面に右上がりタタキメが残る。色調は外面にぶい黄色、内面灰白色となる。28は弥生土器壺の底部である。底径3.5cm、残存高5.4cmで、外面にナデの跡が残る。色調は灰白色を呈する。29～32は高杯の柱状部である。29は柱状部内面に絞り目がある。色調は淡黄色を呈する。30は柱状部上部が中実で、内面に絞り目がある。色調は外面が淡黄色、内面浅黄橙色となる。31は中空で、色調は浅黄橙色となる。32は中実で、色調は外面淡橙色、内面灰白色となる。33は台付鉢などの底部と思われる。底径4.8cm、残存高4.2cmで、内外面摩滅し、色調は浅黄橙色である。34は弥生土器、広口壺口縁部である。口径は復元できない。色調は外面淡黄色、内面黄灰色である。内面をヘラミガキする。35は弥生土器広口壺口縁部である。口径16.8cmで、色調は淡黄色である。口縁端部を抜掘して、3条の凹線文を施し、その上から円形浮文を貼りついている。

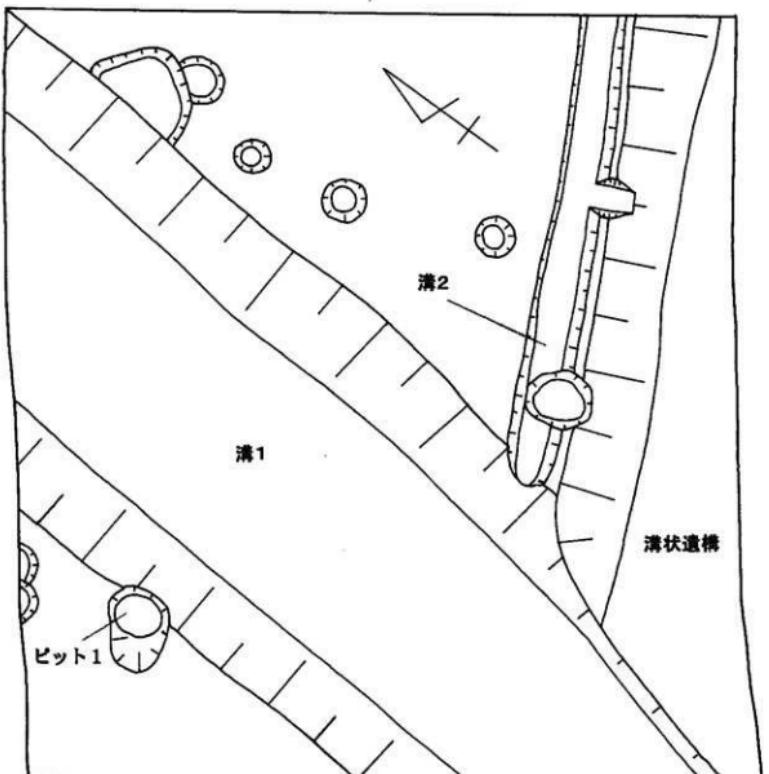
36は棒状有孔土錘である。残存長4.4cm、孔径0.8cmである。浅黄橙色を呈する。37は須恵器口縁部である。口径11.6cmで、外面紫灰色、内面黄灰色で、内外面とも回転ナデを施す。38は鉢か高杯の口縁部である。口径22.4cmで、灰白色を呈する。外面に凹線文を2条施す。39は弥生土器壺である。口径12cmである。40は弥生土器の底部である。底径4.4cmで、上げ底である。41は弥生土器壺底部である。底径は5.6cmである。内外面摩滅のため、観察しにくい。42は杯Bの底部と思われる。体部は内外面回転ナデを施している。高台は断面方形で、底部の周縁近くに貼り付けられている。43は、平高台を有する椀の底部と思われる。底部には、回転糸切痕が残る。44は口径28.6cmの須恵器蓋片である。口径から皿蓋と思われる。41から44は、第3層より出土した。第3層は弥生土器片も含むが、須恵器片が目立つ印象である。45は高杯の脚部片である。表面採集による資料である。



加古川バイパス側道

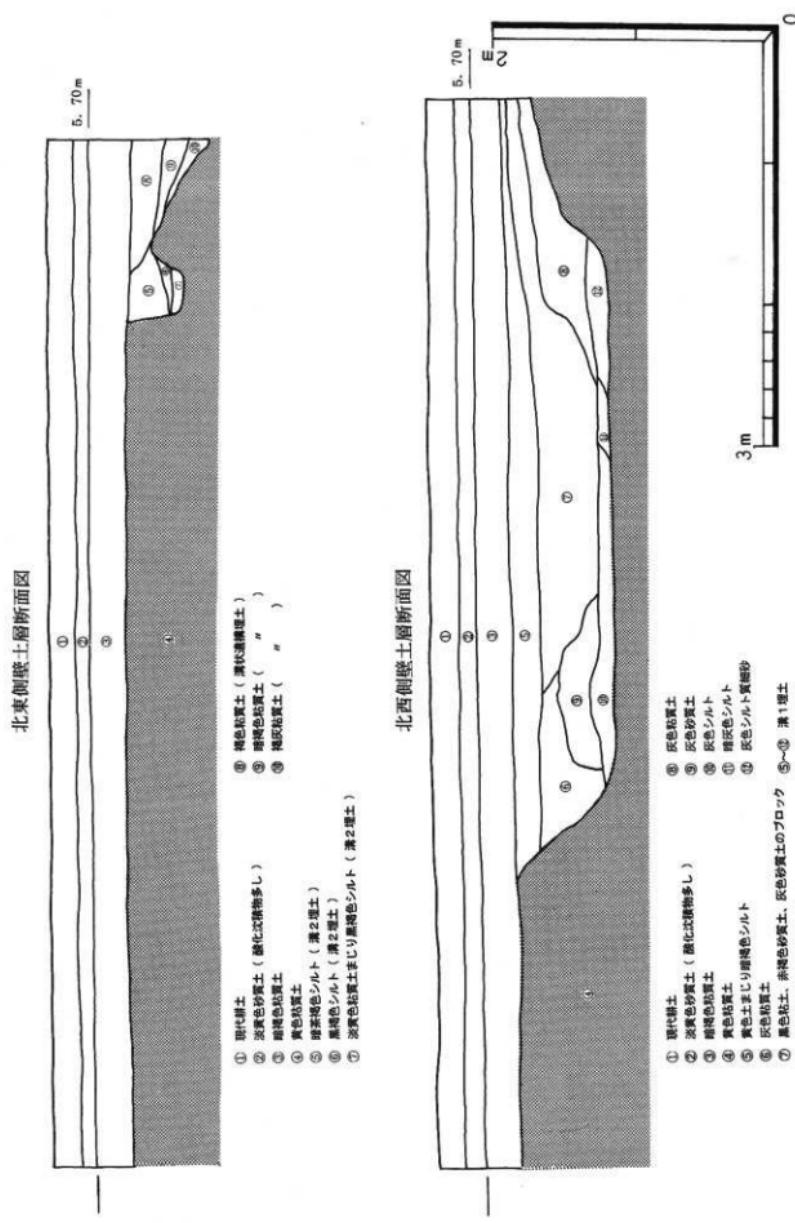


第14図 調査区設定位置図

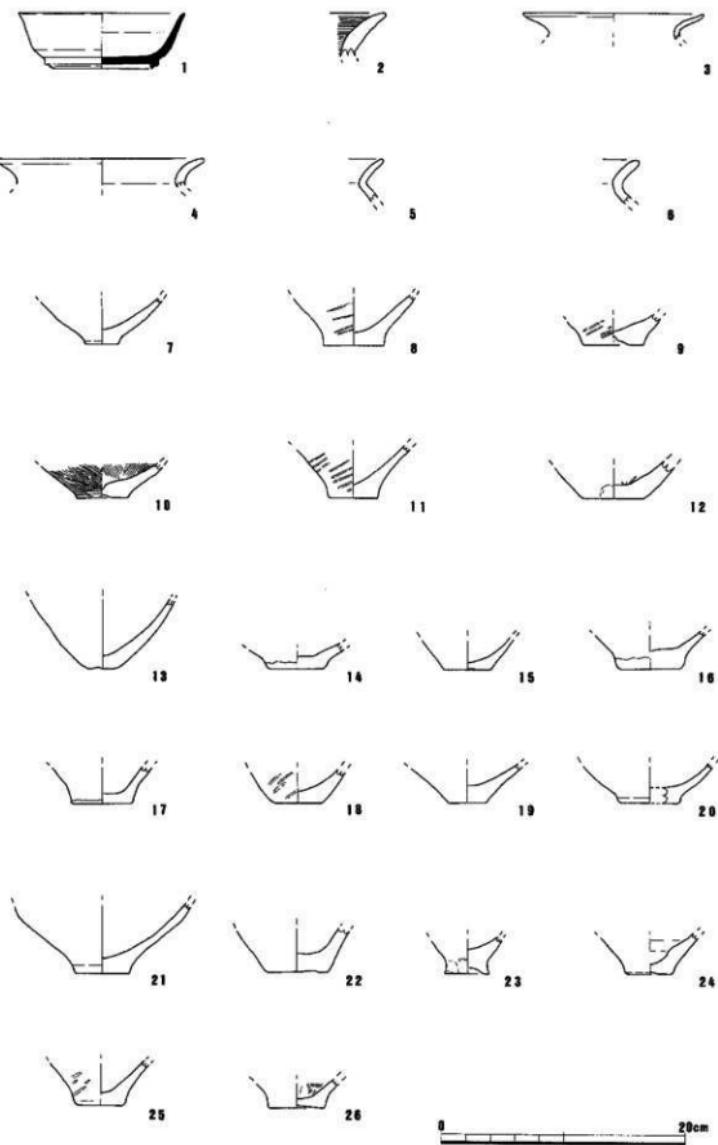


0 6m

第15図 溝之口遺跡遺構平面図



第16図 溝之口遺跡土層断面図



溝之口遺跡出土土器実測図
溝1(1・2) 溝2(3~26)

第17図 溝之口遺跡出土遺物実測図



27



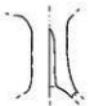
28



29



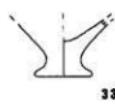
30



31



32



33



34



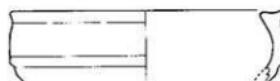
35



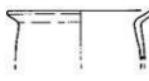
36



37



38



39



40



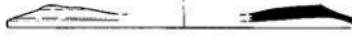
41



42



43



44



45



溝 2 (27~38) ピット 1 (39・40)
第 3 層出土 (41~44) 採集 45

写 真 図 版

調査地全景
(西より)



第1トレンチ
(南東より)



第4トレンチ
(北西より)



第6 トレンチ
(南東より)



第7 トレンチ
(南東より)



第8 トレンチ
(南東より)



第9トレンチ
(北西より)



第10トレンチ
(南東より)



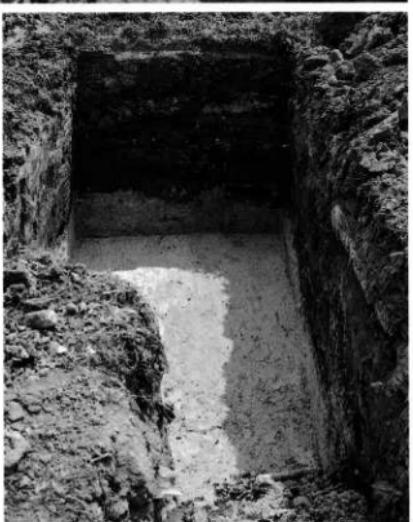
第12トレンチ
(南西より)



第13トレンチ
(北西より)



第16トレンチ
(北西より)



第18トレンチ
(南西より)



調査地風景写真



作業風景写真



試掘坑1
(北西より)



試掘坑 6
(北西より)



試掘坑 8
(北西より)



試掘坑 9
(北西より)



試掘坑10
(北東より)



試掘坑12
(北西より)



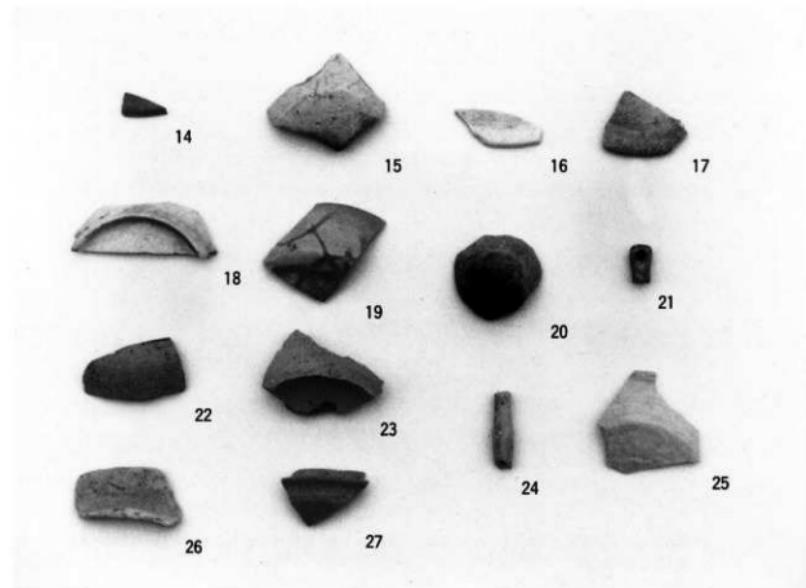
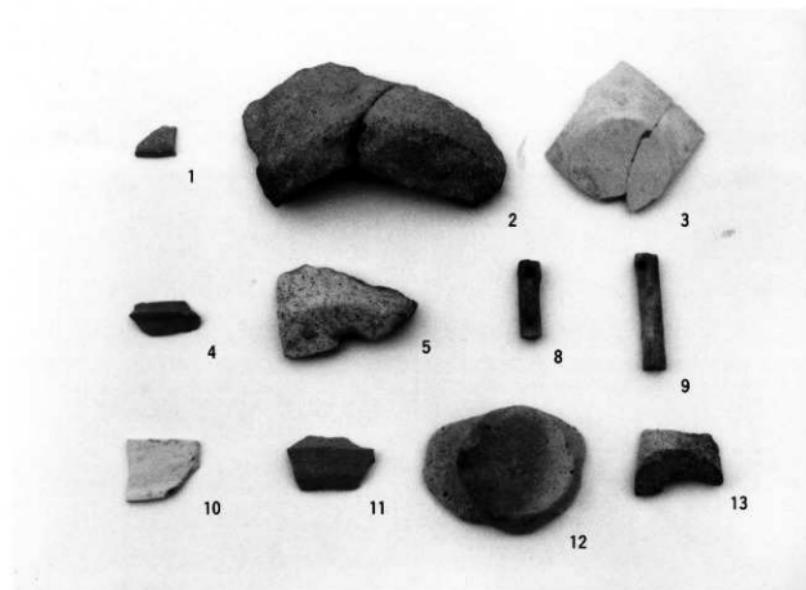
試掘坑15
(北東より)

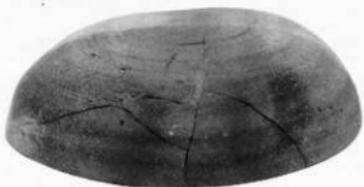


試掘坑21
(北西より)



写真図版九 平津構居跡遺物写真





6



7



28

掘削作業風景写真



測量作業風景写真



第3層上面
(北東より)



造構完掘状況
(南西より)



溝2・溝状遺構
(南西より)



ピット群
(北西より)



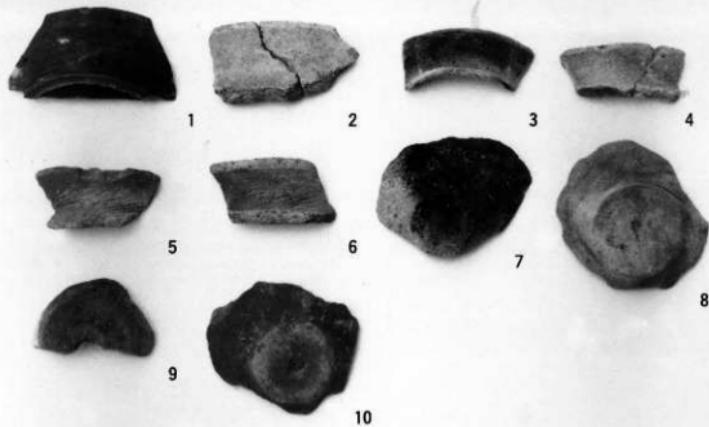
溝1(南より)



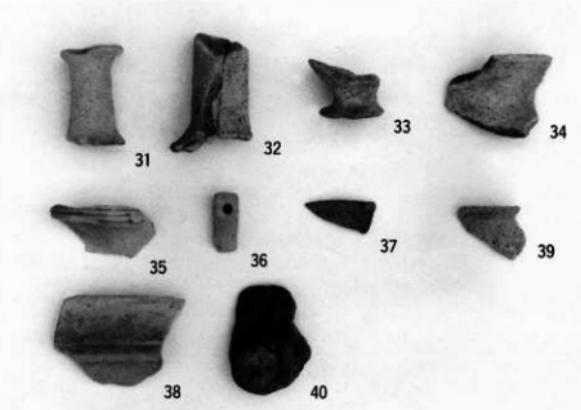
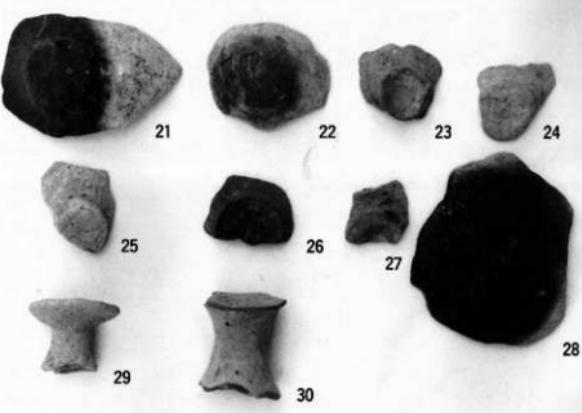
造構完掘状況
(東より)



写真図版十四 溝之口遺跡遺物写真



写真図版十五 溝之口遺跡遺物写真



報告書抄録

フリガナ	カコガワシマイゾウブンカザイチョウサシユウホウ II						
書名	加古川市埋蔵文化財調査集報 II						
シリーズ名	加古川市文化財調査報告						
シリーズ番号	18						
編著者	西川英樹						
編集機関	加古川市教育委員会 文化財調査研究センター						
所在地	加古川市平岡町新在家1224-7						
発行年月日	平成15年12月1日						
所取遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
JR東加古川駅北地区試掘調査	兵庫県 加古川市 平岡町新在家 1670-1他	市町村 28210	34度 44分 30秒	134度 52分 30秒	平成15年 9月3日～ 10月2日	210m ²	土地区画 整理事業
平津構居跡	兵庫県 加古川市 米田町平津 552他	市町村 28210	34度 46分	134度 49分	平成8年 11月20日～ 平成9年 1月23日	116m ²	土地区画 整理事業
溝之口遺跡	兵庫県 加古川市 加古川町 溝之口1-1	市町村 28210	34度 45分	134度 51分	平成11年 7月2日～ 8月6日	60m ²	個人住宅 建設
所取遺跡名	種別	時代	遺構	遺物	特記事項		
JR東加古川駅北地区試掘調査			なし	なし			
平津構居跡	城館跡 遺物散布地	弥生時代～平安時代	ピット 溝状 遺構	弥生土器・土師器・ 須恵器・瓦片			
溝之口遺跡	集落跡	弥生時代～平安時代	溝状 遺構 ピット	弥生土器・土師器・ 須恵器			

加古川市文化財調査報告 18

加古川市埋蔵文化財調査集報 II

2003年12月1日発行

編集・発行 加古川市教育委員会 文化財調査研究センター
〒675-0101 兵庫県加古川市平岡町新在家1224-7
TEL(0794)23-4088

印 刷 丸山印刷株式会社
〒676-8566 兵庫県高砂市神爪1-11-33
